「風ラボ」「唄ラボ」「食ラボ」を通して与那国を体感し交流することがテーマの施設

DiDi 与那国交流館

Vol.1
2018・January

神衣タナチ

神と人をつなぐ神衣「タナチ」
神のマチリを飾る「祝の唄」
神への感謝と神からの贈り物「クムティ」
与那国の風と唄と食とマチリの関係

光と影が織りなす空間

与那国の祭事や文化を体験できる３つのプラン

民具体験

60分 1,300円

対象人数：1～5人
内容：草編み玩具
カブチ（鍋敷き）
ウブル（水汲み）製作など

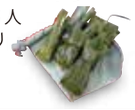
芸能体験

60分 1,300円

対象人数：1～3人
内容：三線
太鼓の教習

食体験

60分 1,200円



対象人数：1～5人
内容：クバ餅作り

＜お問合せ／ご予約＞
TEL：0980-87-2166 FAX：0980-87-2166

■営業時間：9:00-17:00
■休日：月曜日・年末年始（12月29日～1月3日）
■与那国空港より車で約10分
■駐車場：16台／館利用者は無料

DiDi 与那国交流館

〒907-1801 沖縄県八重山郡与那国町与那国1107
発行：一般社団法人与那国フォーラム

マチリ　神と人が交わる神（カンヌ）の月（ティ）

きゆぬひば　むとばしへー
（今日の日をもといにして）
くがにひばにしきしへー
（黄金日をよりどころにし）
ヒヤラーへー
んかちどぅち
かんたゆぬ　まにどぅす
（昔年　神達の真似をする）
へー
うやぎどぅち
かんたどぅち　なりよりば
（富裕の年 神達の年になったから）

＊福里武市他著「改訂増版　声楽譜附与那国民謡工工四」（昭和45年）74・90頁

♫生ドゥンタを
聞いてみよう♩

【風ラボ】与那国を学び、親しむ

神と人をつなぐ 神衣タナチ

文責　田里 鳴子

タナチとは

かつて13人もいたッカ（司）は、現在1人。与那国町教育委員会には、四代にわたって伝統の技と歴史の重みを備えた、先代の仲吉ッカ（司）のタナチが寄贈されている。タナチとは、ッカ（司）が祭事において祈願をするときに身に着ける黄色い神衣。いうなれば、神と接するための衣装である。タナチの鮮やかな色合いは、ンナン（クチナシ）による草木染めと、海岸の潮と混ぜた赤土を用いたンタドゥミ（泥染め）によって染められたといわれている。黄色は中国王朝では高位を表す色だったという。司も、かつては女性が務める気高い仕事だったのだろう。沖縄本島では打掛をタナシと呼ぶ。文化の流れは、首里から宮古・八重山を経てどうなんへと連なり、「タナチ」と「タナシ」も、タ行の三段活用の中で変化しているのかも知れない。

↑かつては、13人もいたッカ（司）。
なんと気高く、厳かであろうか。

娘への想い

仲吉ッカ（司）の長女の與那覇勝子氏（那覇市在住）は、今年のマチリで、母がやり残したティヌギ（神へのつとめが終わり世話になったことへのお礼の祈り。供え物をして、つとめから解放してもらうこと）をするために与那国へ帰省した。彼女に、今のご母堂の想いなどを聞いてみた。

「本来ならば、代々女系が受け継ぐものと心得ていました。しかし、病床にある母は、すっかり神人の貫禄で『もういいよ』と、言ってくれています。これまで神に仕えてきた母の役目を改めて思い、深い感謝の念でいっぱいです。」

娘には司を継がせないという。しかし母の想いは、しっかりと娘へ引き継がれていた。

←ンバダマ
（シャミセンカズラの一種）で作った草冠

島仲祭

①アサカダイ（前のトゥニ）／アサカダイ（後のトゥニ）→ ②前のトゥニのミドゥマチ（アラガウガン）→ ③後のトゥニのミドゥマチ（イッタ）→
④ウィバルウガン → 〔⑤栄家〕（旧屋敷跡）註七 → ⑥トゥニカダイ（後のトゥニ）→ 〔⑦友利家〕（旧屋敷跡）註八
⑧トゥニカダイ（前のトゥニ）→ 〔⑨トゥニでの一泊〕 → ⑩アンタドゥミ（前のトゥニ）／アンタドゥミ（後のトゥニ）→ 〔⑪帆安祭へ〕

帆安祭

①アサカダイ（トゥニ）→ ②ミドゥマチ（ドゥナンバラ按司の妻の墓）→ ③祖納家（旧屋敷跡）→ ④与那原家（旧屋敷跡）
〔⑤野原家〕（旧屋敷跡）註九 → ⑥トゥニカダイ（トゥニ）→ ⑦トゥニでの一泊

アンタドゥミ

①アンタドゥミ（トゥニ）→ ②カンバカリ（ハイナグ）→ ③ヌチバカリ（チラクンダ）

久部良祭り

①ミドゥマチ（ミルマ）→ ②トゥニカダイ（トゥニ）→ 〔③トゥニでの一泊〕→
④アンタドゥミ（トゥニ）→ 〔⑤浦祭へ〕

浦祭

0.ティダンドゥグルでの出迎え（ティダンドゥグル）→ ①アサカダイ（トゥニ）→ ②ミドゥマチ（ウプンスガティ）→
③黒島家（東村）→ ③祖納家（東村）註六 → ⑤長若家（東村）→ ⑥大俣家（東村）→
⑦トゥニカダイ（トゥニ）→ 〔⑧トゥニでの一泊〕→ ⑨アンタドゥミ（トゥニ）

比川祭り

①ミドゥマチ（カダラブグ）→ ②竹本家（比川村）→ ③後間家（比川村）→ ④トゥニカダイ（トゥニ）
〔⑤トゥニでの一泊〕→ ⑥アンタドゥミ（トゥニ）

↑各マチリの時系列
与那国町史編纂委員会事務局編『黒潮源流が刻んだ島どぅなん　国境の西を限る世界の、生と死の位相』（町史（本巻）第二巻民俗編）与那国町役場発行（2010年）166-167頁

タナチをめぐる 染色の謎

筆者は、タナチの鮮やかな色合いは、ンナン（クチナシ）などによる草木染と海岸の潮と混ぜた赤土を用いたンタドゥミ（泥染め）によって染められた、と近所のおばさんから聞いていた。そのンナンは、かつて小嶺旅館前の石垣や我那覇家裏の石垣に、昔たくさん生えていたのを覚えている。しかし、泥だけで染められていた可能性もあるという。経験者の長濵徳美さんに聞いた。

↑徳美工房 長濵徳美さん

徳美さんは10年ほど前、タナチの黄金色を再現しようと、島内を調べ回っていた。普通の泥染めはグレーか、茶系の色になる。黄金色になる染付はなかなか見つからなかったが、当時教育委員会の総務課長だった（故）杉本和章さんに場所を聞き、泥を採取することができた。それを用いて染色家と相談しながら染めたところ、見事、黄金色に染まったという。その場所は、北牧場の崖下だった。土は露出していたものの、波しぶきが上がるギリギリの岩場から、少しずつ掘って採取するしかなかった。現在は崖の一部が崩れ、もう陸からは近づけないという。

杉本氏は小学校低学年のときに、崖の上から縄でくくられ、崖の下まで吊るされて採取したという。そして、彼が採取したのが最後だったのではないかというのだ。

泥だけで染めたのか、ンナン（クチナシ）で染めたうえに泥を用いたのか？さらなる調査が望まれる。

↑ンタドゥミ（泥染め）を採取した付近。

↑ンタ（染めの原料・原石）

唄

【唄ラボ】芸能をとおし与那国を学び、楽しむラボ

文責　與那覇有羽

〝神の月〟マチリを飾る 祝の唄

神から富貴をたまわる 大椀・中椀

マチリの祭場にて御神酒を賜る際に唄と口上が交わされる。唄と口上が示す通り、神から富貴なる世を賜る祝いの唄である。来賓・島の代表である神役の司と公民館長が神からの献杯を受けることで神の加護により島全体・島民の幸福を招く神の月を飾るに相応しい予祝の唱でもある。

【ウブダラ】
うやぎうぶだらみゆやしより
（富貴の大椀で召し上がって下さい）
いぬていがふ　すうにんどうぬ
うにがいす
（命果報　万民のお願いをします）
※口上例
■献杯女
まぁまり　つぁーり
（よくできた神酒を差し上げます）

■来賓
まぁまりや　ぬてぃがぶ
す　うにんぬ　どうぁいぬん
さぐどう
たぼらりたるゆ
（よくできた神酒は命果報長寿のお祝の神酒をいただきました）
■献杯女
かだいまり　つぁーり
■来賓
かだいまりぬ　にんがいや
ばちまゆ　みちまゆぬ
にんがいぬ んさぐどうんがあ
みたるゆ
（芳ばしい神酒の願いは　吾島の豊年の　この島の豊饒の願の神酒を拝みました）
【ナガダラ】
みうやすえぬうんさぐ
はやしばど
（召し上がって下さい御神酒囃子ばど）
ゆうなじゃな　うーる
（世直る）

＊福里武市他著「改訂増版　与那国民謡工工四」（昭和45年）48、49、51頁　声楽譜附

↑歌謡にともなう儀礼的所作で、酌取の役（女性二人）の1人は、ウブダラ2ケを乗せた膳を捧げ、1人は、ミティ（神酒）の入った容器・パタチを持って、ッカー（客）の前に差し出す。

（右）ウブダラ（大椀）
（左）ミティを飲む容器。
タママチリや新築祝いの席でお神酒を供するための大椀。
ナガダラ（中椀）

↑御前風をかなでる地謡

↑御前風（グディンブ）舞う踊手

足が……シビレる…

祝宴の始りを告げる 御前風

この曲をもって祝宴の座が華やいでいく。その祝宴の主旨によって歌詞が異なる。今回はウラマチリにて歌われる「牛願節」を紹介する。

きゆぬはるんぢて
うしゆかにみりば
（今日野原に出て牛を狩り見れば）
あやうしぬまりびきゆ
ぬうゆえ
（綾牛が生まれたので今日の御祝）

＊福里武市他著「改訂増版　与那国民謡工工四」（昭和45年）104、31頁　声楽譜附

唄い人 踊り人 【ほまれの〝献盃女〟】

米浜玉江

島を支える カイシ人

祖納のマチリでウブダラ・ナガダラを歌う米浜玉江さん。歌い始めてもう10年になるという。きっかけは、ご主人が館長の時に人に頼みに行ったとき。マチリは神聖なものだから歌う人は葬式家、法事家、出産した家には入れず、また四本脚の動物も食べてはいけない。そういう場所に行って汚れているからと断られた。そのため、最初の年は東集落の知り合いのおばちゃんに頼んで教えてもらい、次の年からは自分で勉強して歌うようになったという。後継者の心配もしておられた。

茶碗一杯の果報に 巻踊り 込められた願い

太鼓・銅羅鉦の激しい調べが祝客の最後をしめくくる巻踊りの始まりの合図。

イェーイ　ヘェーイ
イェーイ　ヘェーイ

と歌い手と踊り手が掛け声を交互に交えながらたき火を囲み、両手を繋ぎながら来場した人々が一つの円となり輪を描いていく。

今日の日に何を願うのか。
命果報・産し繁昌・富貴世
旅果報…類々の多幸を
祈願します。
御神酒を酒器に盛り
茶碗を満しその果報を
賜われと祈願します。

と「きゆがひドゥンタ」を歌い右まわりに踊り、また

イェーイ　ヘーイ

とかけ声を交わし次は左まわりとなり「すゆりでいドゥンタ」に変わり歌い踊られる。最後も終わりの合図の

イェーイ　ヘーイ

のかけ声がかわされ再度、太鼓と銅羅鉦が打ち鳴らされ巻踊りを終える。

皆が手をとり、声を合わせ歌い踊られる。これほどマチリの祝宴の最後を飾る、祝の唄が他にあるだろうか。

巻踊りは与那国の芸能を現わす最もたるものである。

↑巻踊（ドゥンタ）に欠かせないンヌン

万感の思いを表す ミルク節 道唄

チンムリとよばれる高膳の上にうず高く積まれた供物を料理の責任者である〝包丁親〟と公民館長が盃を交わし口上を述べ館長、かぎやで風の唄をもって固く結ばれた願いをゆわいた緒に見たて解かれてゆく。

タティダイとよばれる三三九度にもちいられる朱塗りの酒器一式を先頭に、取りわけられた供物を平膳にのせ円をかきながらその座を3週する。それぞれ手にした供物を右へ左へとかかげ道唄・ミルク節の唄にのせ万感をもって踊られる。

思た事を叶え
スゥリース
願た事を果し
ウネシュウラヨー

この唄をもって〝神の月〟マチリを飾り寿ぐ祝の唄が歌い終る。この一連の唄はマチリにだけでなく他の行事、祭事などでも歌詞を替え唄われる、大切な唄である。その唄が示すものは何か、それを知ることにより島の祭事文化を理解する一つの側面になればと今回唄ラボで取りあげてみた。詳細を書くには紙面が限られており、また見解が一致しない面があり遺憾に思われる所もあるが、どうかご理解頂きたい。

↑万感のミルク節・道唄

↑チンムリ譲渡の盃

与那国芸能まめ知識

失われた幻しの〝タマハティ〟

本来マチリの中心的芸能であった〝タマハティ〟と呼ばれる神人一体の舞がかつて存在した。タマと呼ばれる神器があり、その一族から選ばれた女性のみが身にまとい一種のトランス状態となり即興的に踊られた。その様は圧感であったと伝えられており、芸能の原初をあらわす貴重なものであると様々に書き残されている。現在ではどのマチリでもみることはかなわず、すでに失われてしまった。その舞が再びマチリで舞い踊られる日がくる時、真の〝富貴なる世〟がもたらされると思わずにはいられない。それほど〝タマハティ〟が失われた事の大きさは計り知れない。

与那国町史編纂委員会事務局編『沈黙の怒涛　どうなんの100年』（町史別巻Ⅰ　記録写真集　与那国）与那国町役場発行（1997年）10、11頁

【食ラボ】食をとおし与那国を知る

文責　與那覇 有羽

神への感謝と神からの贈り物 クムティ

クムティとは、仏前にならべられた数々の品物を示す、いわゆる供物（おそなえもの）のことである。しかし、クムティの意義は前々神からいただいた多幸・世果報（ドゥガフ）への敬度な感謝の気持ちをあらわすと同時に神からの今年の〝多幸・世果報（ドゥガフ）〟をたまわる。大切な印であり、贈り物でもある。

↑昔のチンムリを模したレプリカ（高さ約46㎝）
←現在のチンムリ（高さ約65㎝）

供物作りの統括者 フッタウヤ

漢字をあてると包丁親となり、供物づくりの統括者への敬称である。その名が示す通り、刃渡約45㎝の牛刀を手に、横幅約1m近い板を前に作業する姿は威厳があり、その名にふさわしく頼もしい存在である。

単に供物を切りそろえるだけでなく、不測の事態にも冷静に対応し、行事を滞りなく済ませる。少し気難しそうであるが、行事を終えると案外気さくな人が多い。

↑折詰の刺身を切る

揚げ豆腐はセールと呼ばれる箱で冷ます→

マチリを知らせる味 スー

スーとは味噌和えのことで、マチリの際はグンナ（長命草）をゆで、千切りにし、味噌和えにする。味の決め手はなんといっても島特産の米味噌。他の調味料と相まってグンナの香りを引き立て、味全体をやさしくまろやかにしてくれる。スーを食べると、今年もマチリだと実感する。

↑長命草を鍋へ投入

↑2~3時間ゆでる

↑細かく刻む

かたい茎を取り除く→

おもてなしの印 シムヌ

マチリを初め、島の大きな行事ではシムヌ（汁物、吸い物）が三膳祀られる。マチリの際は主にソーメン、トーフ、カマボコの三種が具になり、汁はカツオ出汁の澄んだ汁。来賓にも振る舞われ、冷えた体を温めてくれる。

↑出来上がり

純白の御神酒 ミティ

ミティは一見するとカルピス？と見間違える白い謎の液体。しかし注がれるとドローとした味はかすかに酸味と口いっぱいに広がる甘みが特徴的で、独特の発酵臭があり出来ぐあいにより差があるため、好き嫌いがわかれる。初心者は未発酵の段階で飲むのがおすすめ。

昔は炊いた米を健康な若い女性を選び、塩で歯口を清め、その口で噛んで発酵させる原始的な作り方であったという。

もちろん現在はその様なことはなく、米やもち米のお粥をつくりミキサーにかけ砂糖を加えながら加熱し、人によっては泡盛を少量加え発酵をうながすこともあり、分量や加減は作り手にもよって違うが天候や温度により左右されるためとても作るのに気をつかうクムティの一つ。

ゆっくり冷まし、マチリ当日まで大事に保管される。

↑大容器で大量に保管

↑おかゆを冷ましながらミキサーへ投入

チンムリを支える テンプラ

サタテンプラ。直訳すると砂糖天婦羅。巨大なチンムリを支える芯になるのがこのサタテンプラである。大きさもさることながら、とにかく固い!!まるで太鼓のバチのようである。日がたつとやわらかくなり、食べごろを迎える。

↑材料を配合中!!

「チンムリ用テンプラ」
～ひみつの配合（9本分）～

- 小麦粉…1kg
- 砂糖…少々
- 酢（ふくらませる為）…少々

※サーターアンダギーより固めの生地に仕上げる
※「赤黄ばし」の長さにカット

↑ヤキあがりをセールで冷ます

←チンムリに使用するサタテンプラ（ほぼ原寸）

↑ヤキあがりを均一にするため回転中

行事を支えるカイシ人

ザ・テンプラマスター

もう20年以上もサタテンプラを揚げているというお二人。マチリのシーズンだけで総計400本ものテンプラを揚げているとか。大変な作業に見えるが、楽しみながらやっているという。昨年は忘年会も兼ねて、嶋仲女子会の女性たちに揚げ方を教えたそうだ。他にも嶋仲では、皆で山菜採りにも行くという。DiDiでも見習うべき継承のイベントである。

↑（左）田島 笑智子さん
（右）大宜味 智恵子さん

与那国 どう・とうぃむに Vol.1

竹富島の「種子取祭」

文・写真＝金井 瑠都

台風22号の影響でこの数日天候が荒れ、めっぽう船に弱い私はわずか10分の船旅に気合を入れて乗船した。無事たどり着いた竹富島は雨だった。「大丈夫明日は必ず晴れるよ」竹富島に住む友人が笑って話す。何があっても種子取祭は必ず晴れるというのだ。小走りに雨を避けながら、島を探索する。音に誘われ足を向けると、世持御嶽で庭の芸能のリハーサルに出くわした。明日が本番とは思えぬ穏やかな雰囲気で踊る女性達、こちらもワクワクしてくる。観光客へ種子取祭の鑑賞のマナーの説明の中に、砂地にほうき目を入れるお手伝いは積極的にして欲しいという表記があった。手伝ってもいいなんて何だか得した気分だ。夜の竹富島もまたいい、「ハブが出るから道の真ん中を通るといいよ」の教えにちょこっと緊張しながら白砂を踏みしめて奉納芸能の最終稽古を見に行った。翌日、言った通りにカラリと晴れた。真っ白な砂地に青い空、バシャシン（芭蕉で作った着物）で身を包み、唇に紅をひいた踊り手。タイムスリップしたような懐かしい感覚にとらわれる。小さな子供から年寄りまで、島全体が楽しんでいるようで、踊り手も観客も笑顔が弾ける。この日に合わせて島外からもたくさんの郷友が集う、「種子取へ行きたい、踊りたい、参加したい」と島を想う気持ちが集結する。演目も終盤、都合で最後まで見られず後ろ髪を引かれる思いで石垣港行きの船に乗る。こんなにも溢れ出る想いの根っこは何なのだろう、素朴な疑問に「これが『うつぐみ』の心さ。」宿の主人の言葉が耳に残る。10分後、船は石垣港へ着岸、夢のような時間から現実に引き戻されたのだ。

EVENT

「第1回 DiDi マルシェ」開催

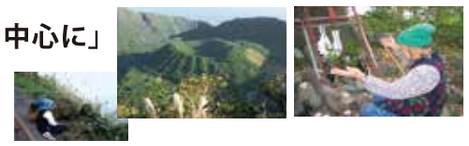
■2018・2・3（土）
■10:00〜15:00
■DiDi 与那国交流館

みんなが集まれば何かが生まれる！
「島のいいもの」がいっぱい！

LECTURE

【講演会】「伊豆諸島の巫俗-八丈島・青ヶ島を中心に」

土屋 久（順天堂大学兼担講師）
■2018年2月18日（日）
■19:00〜21:00



海の向こうで「なにやら新しいコト」が始まっている！

台湾交流通信 Vol.1

文・写真＝松田 良孝

アミ族の村へ 島ならではの導き方

2013年に修復されたアミ族の伝統建築＝2016年11月16日

光復駅＝2017年10月23日

日本統治期に建設された製糖工場は、現在は観光施設となり、キビ運搬用の列車も展示されている＝2017年10月23日

太巴塱小学校の児童とともに調理実習を楽しむ与那国の小学生（右側の3人）＝2017年12月18日

豊かな自然に囲まれているように感じる。花東縦谷と呼ばれる台湾東部の谷が、交流の舞台だ。与那国島の小学生が台湾でホームステイする毎年恒例のプログラムが昨年12月に行われ、花東縦谷にある太巴塱（タバラン）小学校の児童と交流したのだ。昨年は、町と花蓮市が姉妹都市になって35年の節目。同校は花蓮市と同じ花蓮県にあり、小学生の交流はこの姉妹都市提携あってのものである。

同校児童はほとんどがアミ族で、与那国の子どもたちを前に伝統的な踊りを披露。地区内には独特の文様をあしらったオブジェが点在し、2013年には伝統建築の修復も行われている。

「タバラン」と聞いて「それは一体どこに?」と首を傾げてしまった町民もいるだろう。太巴塱のある花蓮県光復郷には豊かな自然のほかに、日本統治期の大正年間に建設された製糖工場をリユースした観光施設があるが、特別有名な土地ではないというのが実際のところだ。

今、台湾では日本が溢れている。「カワイイ」という言葉がそのまま通用し、ユニクロもある。だからこそ、マイナーな場所に足を運ぶ意味があるのではないか。現地の情報が少なければ、子どもたちを送り出す側としては心配があるかもしれない。だが、こうした地域で同世代の小学生と机を並べるチャンスはそうそう得られるものではない。

花蓮と与那国の縁を機に台湾で語学留学中の山口ゆいさん（21）＝比川出身＝がこんなことを言っていた。「（台湾へ来たら）台湾の人しか行かない場所へ行き、中国語や台湾語ばかりのところを見てほしい。小学生や中学生なら衝撃を受けると思う」。

植民地台湾への出稼ぎや、戦後のケーキ時代が島の歴史として刻まれているように、小学生の交流もいずれは町史の一コマになる。もともと台湾と深いつながりを持つ与那国島の、その島ならではの導き方として。